様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３４３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０７５

研究課題名（和文）「宗教間体験の現象学」構築のための基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research for phenomenology of inter-religious experience

研究代表者
古荘　匡義（FURUSO, Tadayoshi）

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：４０７１０４４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、宗教との対話を、宗教を理論的に「理解」することとしてではなく、他の宗教と関わる各個人の「体験」や「実践」のなかで信仰が保持されつつも変容していくという「宗教間体験」として捉え、ミシェル・アンリの現象学を軸に、この体験を現象学的に記述するための「宗教間体験の現象学」の基盤を構築した。さらに、この理論的な基盤に基づいて、ダライ・ラマ14世の宗教間対話や綱島梁川の宗教実践などの具体的な事例を分析することによって、宗教との対話における体験や帰属の重要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this project, I first, based on Michel Henry's philosophy, developed a phenomenological method for the analysis of inter-religious experience, which is a collaboration among those who hold different respective beliefs, and which deepens their own faith and makes it possible to engage in inter-religious dialogue. Then I demonstrated the validity of this method by applying it to the analysis of dialogic practice of the Dalai Lama and Ryosen TSUNASHIMA. This project ultimately clarified the importance of inter-religious experience and multiple religious belonging in the process of religious dialogue within, and across respective faiths, as well as in the relationship between the religious and non-religious.

研究分野：宗教哲学

キーワード：宗教間体験　ミシェル・アンリ　宗教多元主義　現象学　ダライ・ラマ14世　綱島梁川　宗教間対話

１．研究開始当初の背景

(1)本研究の動機

申請時において、研究代表者はそれまで遂行してきた二つの研究を結びつける形で本研究を着想した。

第一に、研究代表者は一貫して現代フランスの現象学者ミシェル・アンリ（1922-2002）の思想を専門的に研究していた。アンリは初期の頃から、現象が現象することの本質を根源的な自己体験のうちに認める現象学的分析を展開してきた。しかし彼は、晩年に至って、キリスト教の聖書の言葉を大胆に哲学に取り入れて「キリスト教の哲学」を展開するようになった。研究代表者は特にこの晩年の思想を、哲学とキリスト教とを照合する哲学的な対話実践として解釈した。

第二に、研究代表者は、平成 23〜24 年度に龍谷大学人間・科学・宗教オープンリサーチ・センターに RA として所属し、宗教間対話の哲学的理論の構築に取り組んでいた。とりわけ現象の本質を根源的な自己体験に認めるアンリ哲学を基盤にして、諸宗教の対話的研究が知的な相互理解としての対話を中心としていることに疑問を投げかけた。

本研究は、これら 2 つの研究を融合し、宗教間対話を可能にするものが宗教間の「体験」であることを解明することによって、この「体験」を記述しうる現象学的な理論を構築し、その理論を用いて具体的事例を分析することを目指した。

(2)本研究の背景と着想

これまでの「宗教間対話」の理論では、各対話者の《能動的》な自己改革の営みとして対話が理解されていた。本研究はこの前提に疑問を呈し、《受動的》な「体験」を基盤にした「宗教間対話」理論を提示するという着想から研究を展開した。

まず、背景となる既存の「宗教間対話」理論について簡単に述べておこう。第 2 ヴァチカン公会議以来、キリスト教諸派を中心に、宗教多元世界における他宗教理解の問題が広く議論されている。キリスト教神学における対話の理論は、キリストを信じない人にもキリスト教的な救済の可能性を認める「包括主義」が主流である。それに対し、ジョン・ヒックらは、この包括主義のキリスト教中心主義を批判して、「多元主義」を提唱した。ヒックは、「偉大な世界宗教」の信仰が唯一の究極的な〈実在〉（Real, Reality）に対する人間の応答であり、この応答において人間が自己変革していくという点で共通していると仮定する。そして、神やアッラー、ダルマといった諸宗教の超越的なものは、現実に存在する超越者ではなく、実はこの不可知な〈実在〉の歴史的な現れであり、宗教による救済とは、「生来の自我中心から、神的なもの・究極者・〈実在〉中心へと移行する、人間存在の現実的な変革」（John Hick, *The Rainbow of Faiths: Critical Dialogues on Religious Pluralism*, London, SCM Press, 1995, p. 18.）だと考える。

このヒックの考えでは、この〈実在〉は、諸宗教が多元的に存在することを説明し、諸宗教の対話の基盤を構築するために理念的に想定された一元性であり、この想定によってこそ各宗教は自身の絶対性を反省できる。このとき宗教間対話は、対話者同士が互いの信仰を尊重し、各々が自らの宗教の絶対性を反省して自らの宗教を《能動的》に変革していくことだと想定される。

しかし、このように想定された宗教間対話は自明のものだろうか。藤原聖子（『「聖」概念と近代』大正大学出版会、2005 年）も批判するように、既存の宗教間対話の議論では、対話が困難な状況での対話の可能性を考察できない。宗教同士が対立している状況という、まさに対話が必要なときほど、対話の場は開かれないのである。また、たとえ自分が他の宗教から学び、自らの宗教を変革したとしても、相手が自らの絶対性を主張し、自らの宗教を変革しなければ、相互的な対話は成立せず、宗教間の対立も解消しない。

では、どのようにして対話の可能性を考察すべきなのだろうか。藤原はこの問題を、批判的かつ体系的な比較宗教学によって克服しようとするが、研究代表者は、濱田陽の研究（『共存の哲学：複数宗教からの思考形式』弘文堂、2005 年）に学びつつ、宗教間の「体験」に着目した。

濱田は宗教間対話の可能性を探るにあたり、宗教者や宗教研究者の間の相互的な知的交流ではなく、霊性交流や宗教協力の体験事例から、諸宗教の共存のための「複数宗教からの思考形式」を抽出する。この濱田の研究は、宗教と宗教の対話だけでなく、無宗教者が宗教と対峙せざるを得ない体験や、宗教が社会の現実や異文化と関わる体験も研究の射程に入れているという意味で優れている。

ただ、哲学的な対話理論の構築を目指す本研究は、ハイデガー以降の現象学・存在論を基にして、他の宗教と対峙し他の宗教と対話せざるを得ない状況に投げ込まれつつ自己の存在を了解することになった現存在の存在理解を現象学的・存在論的に分析するという方法を採用した。

具体的に説明すれば次のようになる。もし宗教的信仰が自分の信じる内容を絶対的なものとして確信することであるなら、理論的には宗教間対話は起こりえないことになる。しかし、実際には、たとえば他の宗教に対峙している状況のなかで他の宗教から実存的な衝撃を受けたとき、自らの信仰に対する絶対的な確信は揺るがないけれども、自らの信仰に対する態度や信仰内容が変化してしまう、という体験はあり得る。このような根源的な変容の体験こそが、他なる宗教との対話を成り立たせるように思われる。別言すれば、能動的な自己変革としての宗教間対話の手

前に、望むと望まざるにかかわらず、他の宗教との対話の場に投げ込まれて、自らの宗教的アイデンティティが保持されつつも変容されていくという《受動的》な体験が存するのである。

そこで本研究では、この体験を「宗教間体験」という概念で捉え、このような体験において人間が自己の存在を了解する仕方を分析するための理論を、ミシェル・アンリの現象学を参照しつつ構築することを目指した。さらに、このような理論によって、ある宗教的な真理を絶対的に信仰しているにもかかわらず、他の宗教との対話が可能であるような人間の存在論的構造を解明することを目標とした。

２．研究の目的

本研究では、異なる宗教間の対話を、互いの宗教を理論的に「理解」することとしてではなく、他の宗教と関わる各個人の「体験」や「実践」のなかで、宗教的なアイデンティティが維持されつつもその内実が変容していく現象として捉え、「宗教間体験」と名付けた。そして、この「宗教間体験」の現象を分析するための理論的方法を確立し、この理論の有効性を具体的事例の分析を通して検証することを本研究の目的とした。

具体的には、次の２点を目的とした。

(1)ミシェル・アンリの哲学の体系的な解明を通して、「宗教間体験の現象学」の理論の基盤を構築する。
(2)この理論を用いて、ダライ・ラマ 14 世による宗教間対話の実践や綱島梁川による宗教体験の言説化を分析し、この理論の有効性を文献レベルで検証する。

３．研究の方法

上記目的の(1)、(2)を以下の方法で達成した。

(1)「宗教間体験の現象学」の理論構築

研究代表者は、特にミシェル・アンリの思想研究を通して「宗教間体験の現象学」の理論を構築すべく、アンリ思想の理論的な展開と、彼が思想を実践していくこととの関係を分析するための方法を構築した。

その方法とは、次の二つの研究を組み合わせることであった。すなわち、一つは、徹底した通時的解釈である。特にアンリ哲学における「実践」概念の連続的な展開を辿ることによって、アンリの後期思想を、前期思想と連続した「哲学」として分析した。

もう一つは、アンリの思想的変遷とアンリ自身の実存的変化とのリンク付けである。つまり、重大な出来事や思想との出遭いによってアンリの実存が変容し、この変容にともなってアンリの思想も変化した、という形で実存の変化と思想の変化との関係を分析した。

(2)上記理論による具体的事例の分析

宗教間対話・霊性交流の実践者としてダライ・ラマ 14 世および綱島梁川を取り上げ、二人の著述の分析を通して(1)で構築した「宗教間体験の現象学」の理論を検証した。

ダライ・ラマ 14 世については、キリスト教の聖書に仏教の観点からコメントした実践を(1)の理論によって分析することを通して、(1)の理論の有効性を示した。

ダライ・ラマ 14 世は、思索の内容と実践が一致した宗教者である。すなわち、仏教の伝統に根ざしつつも自宗教の絶対性を反省し、諸宗教の共存の必要性を強調する思想が、彼が取り組んでいる宗教間対話の実践と緊密に関係している。この緊密な関係性を解明すべく、(1)の理論で彼の著作（His Holiness the Dalai Lama, *The Good Heart*, London, Rider, 1996, c2002）を分析することを通して、理論の有効性を検証した。

綱島梁川については、人生の出来事と思想的な展開とが緊密な関係をもつ綱島の思想を(1)の理論的な方法によって分析することで、この理論の有効性を検証した。特に、彼の哲学的な思想の展開と、宗教体験を契機とした彼の実存的な変遷との関係性を中心に分析した。

４．研究成果

(1)主な成果

本研究において得られた成果は次の 2 つにまとめられる。

①アンリ思想の内容や形式の変化は、重大な出来事や他の思想との出遭いに対する実存的な応答であり、哲学的な実践の産物であることを明らかにした。さらに、聖書のことばと自らの現象学とを照合するという「キリスト教の哲学」の特異な形式も、アンリが必然的に選択した哲学的実践の形式であることを示した。

そして、次のような形で宗教間体験を分析するための理論を形成した。実際の宗教間対話においては、宗教的な思想内容のレベルでは、相互的理解を通して互いに自己の思想を変容することは不可能でも、他の宗教を信仰する者と体験や実践を共有するなかで、実存的な衝撃を互いに与え合い、根源的な自己体験を互いに被ることによって、思想が相互的に変化していくことがありうる。このとき、思想が変化していくことそれ自体が対話的な実践となっている。このように、思想のレベルではなく、根源的な自己体験のレベルで

相互的な作用が生じるとき、宗教間対話が実現し、そのとき対話者において思想の変遷と実存の変化とは緊密にリンクしているのである。このリンクが、アンリの哲学的実践における現象学とキリスト教とのリンクと同型的であることを示し、アンリの哲学理論を応用して、宗教間対話における思想の変化と実存の変化との関係性を解明できるような理論を構築した。

この成果を課程博士論文「ミシェル・アンリの『実践＝哲学』」の一部としてまとめることができた。また、この理論の核心部分を『国際ミシェル・アンリ研究』（*Revue internationale Michel Henry*）に仏語論文の形で公表することができた。

②上記の理論的な基盤にもとづいて、綱島梁川の宗教実践、ダライ・ラマ 14 世の宗教間対話などの具体的な事例を分析した。

綱島梁川については、以下のような分析を通して①の理論の正当性を評価した。

綱島は、大学時代に受容した西洋哲学によって文芸批評や倫理研究を展開していたが、結核の闘病生活で死に直面し続けるなかで、宗教に関する思索を深めていった。そして、「見神の実験」という神秘体験を得てからは、キリスト教に根ざしつつもさまざまな宗教や思想を取り入れて、自らの神秘体験を言説化していった。そこで、①の理論を用いて、綱島の人生の重大な出来事と、彼の思想展開とが緊密にリンクしており、彼の宗教体験の言説化を通じた思想の深化それ自体が安心立命を獲得するための実践の顕れであることを明らかにした。このような形で、①の理論の有効性の一端を示すことができた。

上記の分析を、日本宗教学会の学術大会等で発表し、明治宗教思想や宗教間対話に関心をもつ研究者と議論することができた。

さらに、この①の理論を用いてダライ・ラマ 14 世の対話実践やカトリーヌ・コルニールの「複合宗教帰属」の概念を分析することによって、宗教との対話における体験と帰属の重要性を指摘し、宗教者だけでなく、無宗教を自認する者も諸宗教と対話することが可能であり、かつ必要不可欠であることを示した。これらの成果を、中村博武・古荘匡義・岡崎秀麿・本多真著『宗教を開く―宗教多元主義を越えて―』（聖公会出版、2015 年 6 月刊行決定）の第 1 章、「無宗教者による宗教との対話―宗教の体験と複数宗教帰属の視点から―」としてまとめることができた。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望など

①アンリ研究への貢献

ミシェル・アンリの「キリスト教の哲学」を、キリスト教と現象学との対話による思想的実践として捉える本研究の分析は、これまでのアンリ研究でもみられなかったものである。この内容を博士論文としてだけでなく、仏語論文としても公表できたことで、微力ながらも国内外のアンリ研究に貢献できたものと思われる。

②宗教間体験と複合宗教帰属

本研究が提示した「宗教間体験」という概念は、まだまだ宗教間対話の研究のなかで定着しているとは言えないが、今後も研究を続けてこの概念をさまざまな事例に応用していくことで、概念の定着を測りたい。

本研究が宗教間体験を論じる際に鍵概念として分析した「複合宗教帰属（multiple religious belonging）」も、まだ日本ではほとんど論じられておらず、訳語も定まっていない。さらに、この概念が宗教間対話研究の中で論じられることもほとんどない。よって、本研究の成果は「複合宗教帰属」の概念を、日本における宗教間対話の理論的研究に導入するという点で意義のあるものである。

また、海外における「複合宗教帰属」の研究は、主に特定の信仰に根ざした神学的な立場から行われており、日本の宗教を踏まえて「複合宗教帰属」を論じている研究は、管見の限り、Jan Van Bragt の研究（“Multiple Religious Belonging of the Japanese People”, in Cathrine Cornille (ed.), *Many Mansions? Multiple Religious Belonging and Christian Identity*, Eugene, Wipf and Stock, 2002, pp. 7-19）のみである。しかも、日本の「無宗教」という視角から「複合宗教帰属」を論じた本研究は、Bragt の分析とは別の視座を提供することができた。したがって、本研究の成果を外国語で公表すれば、日本の「無宗教」の視角からの日本の「複合宗教帰属」の現状を海外の研究者に伝えられるものと思われる。今後、本研究の成果を海外誌に投稿していきたい。

③綱島梁川研究の今後の発展

本研究で綱島梁川の思想的実践の意義を研究するなかで、綱島の宗教実践を解明するために必要不可欠な資料が依然整理されていないことが判明した。そこで、研究代表者は平成 27～29 年度の科学研究費助成事業（若手 B）の助成を受けて、綱島梁川の重要な未刊行資料の整理・翻刻を行い、それを基にして本研究を 2 つの方向性に展開させていく。すなわち、綱島を中心にして形成された宗教的な共同性の実証的解明と、綱島を日本の宗教哲学の先駆者として位置づける宗教哲学的研究である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①古荘匡義「反復と同時代性―ミシェル・ア

ンリの大学教育論」、『哲學論集』（大谷大学哲学会編）、第 61 号、2015 年、pp. 18-34【査読あり】

②竹中正太郎・古荘匡義・高原耕平「ダイアローグ（対話）としての哲学 ―大谷大学における哲学カフェ 2013 年度実践報告―」、『哲學論集』（大谷大学哲学会編）、第 61 号、2015 年、pp. 38-54【査読あり・研究ノート】

③FURUSO Tadayoshi, “La répétition de la « philosophie du christianisme »”（「『キリスト教の哲学』の反復」）, *Revue Internationale Michel Henry*, Louvain-la-Neuve, Presses Universitaires de Louvain, vol. 6, 2015, pp. 85-101【査読あり】

④古荘匡義「ミシェル・アンリの『キリスト教の哲学』から見た『技術資本主義』」、『宗教と倫理』（宗教倫理学会編）、第 13 号、2013 年、pp.17-31 http://www.jare.jp/activity/pdf/religion-ethics13.pdf【査読あり】

〔学会発表〕（計４件）

①古荘匡義「哲学の実践としての見神言説―綱島梁川における思想の展開―」、『大谷大学哲学会冬季研究会』、2015 年 3 月 5 日、大谷大学（京都府・京都市）

②古荘匡義「綱島梁川における諸宗教との対話から『日本の宗教哲学』へ」、『日本宗教学会第 73 回学術大会』、2014 年 9 月 13 日、同志社大学（京都府・京都市）

③竹中正太郎、古荘匡義、高原耕平「ダイアローグ（対話）としての哲学―大谷大学における哲学カフェ 2013 年度実践報告―」、『大谷大学哲学会春季研究会』、2014 年 3 月 12 日、大谷大学（京都府・京都市）

④古荘匡義「宗教間対話から宗教間経験へ―現象学的アプローチ―」、『日本宗教学会第 72 回学術大会』、2013 年 9 月 8 日、國學院大學（東京都・渋谷区）

〔図書〕（計１件）

①中村博武・古荘匡義・本多真・岡崎秀麿著、聖公会出版、『宗教を開く―宗教多元主義を越えて―』、2015 年（刊行決定）、全 340 頁（分担執筆：3～74 頁）

〔その他〕（計２件）

〈本研究の成果の一部を含む博士論文〉

①古荘匡義「ミシェル・アンリの『実践＝哲学』」課程博士論文〔京都大学〕、2015 年、全 304 頁【査読あり】
博士論文の要旨および審査結果要旨：
http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/195956/2/ybunk00662.pdf

〈公開講座における招待講演〉

①古荘匡義「宗教と対話するには？ ―宗教間対話から宗教間体験へ―」兵庫大学仏教入門講座、2014 年 12 月 6 日、兵庫大学（兵庫県・加古川市）

６．研究組織

(1)研究代表者

古荘　匡義（FURUSO, Tadayoshi）
大谷大学・文学部・助教
研究者番号：40710447